発掘調査の概要

西大寺食堂院などの調査（平城第410次）

巻頭で紹介した第404次調査に続き、その北側を第410次調査として発掘しました。７月末から調査に入り、10月半ばに終了しました。

西大寺食堂院では、大炊殿の全貌を解明したほか、その北側で甲双倉・北門を検出しました。大炊殿は、建物規模東西27m（７間）、南北15m（４間）の巨大な礎石建ち建物です。礎石は坪掘地業を施し据えます。坪掘地業は、一辺約1.5mの方形の穴を掘り、途中瓦層を混ぜながら版築状に土を積みます。礎石がのるはずの穴の中心付近には、拳大から人頭大の石をいれつつ、土を積みます。分業化して組織的で迅速な造営の中で、工事の水準を維持する工夫だったのかもしれません。周辺から鬼瓦も出土しました。大炊殿の屋根を飾っていたのでしょうか。

大炊殿の規模が確定し、甲双倉・北門がみつかったことで、食堂院の建物配置が明らかになってきました。食堂・檜皮殿・大炊殿が南北に並びます。その北に甲双倉・北門があり、檜皮殿と大炊殿の間には巨大な井戸があります（井戸については巻頭記事参照）。大炊殿の東西に檜皮厨が、厨の北にそれぞれ倉代があったようです。第404次調査でも検出した埋甕遺構は、厨と関連する施設でしょうか。極めて計画的な建物配置です。

こうした建物配置からは、食堂院の中が、食堂を中心とする儀式的な「堂」の空間と、それを支える背後の実務的な空間に分かれていた様相がみてとれます。古代寺院の食堂院の全貌が、ここまで具体的に明らかになった例は希有といえます。

西大寺食堂院の北側では、一条北大路南側溝を確認しました。幅は約3.5～４m、残存する深さは約0.7mです。水流もあったようです。北側溝は確定できませんでした。

北辺坊では溝や柱列を確認しました。奈良時代前半から活発な土地利用がなされていました。

10月７日に現地説明会をおこない、約900人ものご来場をいただきました。

また調査中、騒音・埃など、周辺の方々には多くのご迷惑・ご負担をおかけ致しました。住民の皆様のご協力に、心より感謝申し上げる次第です。

（都城発掘調査部　馬場 基）

調査区全景（南から）

一条北大路南側溝（北東から）

大炊殿坪掘地業の様子